

社会福祉方法技術の理論化(II)

構造主義的アプローチ

中 村 永 司

第一章 敵応の概念

第一節 適応の一般的意味

第二節 福祉の対象と適応

第二章 「動き」から適応へ

第一節 ソーシャルワークの志向する「変化」に作用する相互関係の意味

第二節 「動き」とは何か

1 「動き」の理論的仮説

2 「動き」に対するソーシャルワーク的接近

第三節 「動き」の構造主義的接近

第四節 体験過程としての「同化」と「調説」による適応

第三章 ソーシャルワークと構造主義の融合、

拙著既刊論文（仏教大学大学院紀要第5号）で社会福祉方法論統合化の試論として、伝統的な方法論のもつ問題—援助の断片化，知識や技術の限界性—を再考し，克服するために，構造主義の原理を導入して社会福祉の固有性と視点を再確認すべく試みた。

構造主義を社会福祉の理論に適用しようとした試みは，構造主義の理論の中に社会福祉方法論の本質や視角を明らかにする素材を含み，社会福祉方法論の有効性と固有性を明らかにする原理が含まれているように考えられ，さらに既存の方法論の知識を組織化して社会福祉の理論を拡大・補強する意図があったからである。また構造主義が対象でなく方法論追求の理論であるところに本題の主旨とも一致する。

さて本論においては伝統的な方法論のもつ知識や技術を見なおし，ソーシャルワークの臨床場面で展開される「状況における人間」の相互依存関係のもたらす成長への行動と態度変容のメカニズムを追求し，ソーシャルワークの処遇効果を「適応」に焦点をあてて，構造主義の理論枠から分析を試みた。すなわち伝統的な方法論のもたらした人間関係の知識や変容の概念を整理し，その方法による処遇の有効性と妥当性を問い直し，治療的効果のメカニズムを探究するものである。

なお本論文は一つの論文をⅠ，Ⅱに分断して掲載したものである。

第1章 適 応 の 概 念

第1節 適応の一般的意味

適応のもつ意味の多様性については、論者の学問上の相違や視点の差違によって、その意味の規定のされ方もまちまちである。生物学においては、生物体内のホメオスタシスの次元から、社会学においては社会システム論との関連において、あるいはまた、心理学においては自我構造の観点から種々問題にされている。その他あらゆる学問において、適応の概念は非常に重要な意味をなしている。このように多種多様な適応概念を整理すれば、次のようになる。

- ① 社会的文化環境との関係における外的適応と心的状態の推移による内的適応
- ② 環境との関係における受動的、追従的適応、すなわち消極的適応と克服的、能動的適応としての積極的適応、
- ③ 生の保全と発展に資するような健全な適応と生の保全と発展を阻止するような異常な適応。
- ④ 直接的な環境またはその場にふさわしい適応の仕方としての妥当な適応とその場にふさわしくない非妥当な適応。
- ⑤ 環境の力に心身ともうちのめされ、事態に対して、なんの対策もたてずにいる状態としての無適応。¹⁾

かくのごとく適応の仕方について様々な区別を試みたが普通適応という場合、このいずれかに属するものと考えられる。ところで適応 (adjustment) に類似して使われる概念に順応 (adaptation) がある。両者とも生物有機体の生命維持のためには不可欠の要件であるが、両者の相違は順応が「種によって、獲得された行動」を指し、適応は「個体によって、学習の結果として獲得された行動様式」²⁾ であるとされる。いずれにしろその行動様式がアプリオリに獲得されたものか、アポストリオリに獲得されたものかによって生物有機体のメカニズムに関する知見を得る場合の視角は大いに異なると言わざるをえない。本論の展開上（構造主義的アプローチ）次のような適応概念を前提としておきたい。適応とは「環境の諸条件との間に成り立つ関係であって、両者がなんらかの点で一致または調和の関係にある場合」³⁾ 適応状態にあるとする。この場合、主体の側と客体の側の諸条件や両者の適応上のメカニズムについては次節で詳述するが、本節において強調しておきたいことは主体との包括的な関係を脱落して単に主体の側の心理的、身体的な諸特質を論じたり、また客体の側の環境の諸特性を分析して述べたところで、なんら意味を有しない。なぜなら、それらの諸特性は両者の属性であってそれぞれ独立して存在し、なんの関連も有しないからである。もしその諸特性に有機的な意味を附与するとしたならば、そこにはなんらかの場ないし関係を必要とする。

たとえば性格的に几帳面な人が病気になって療養に専念する場合療養規律の非常にきびしい管理監督のゆきとどいた病院に収容されれば、両者の条件は一致し、調和の関係にあるが、病

院の管理監督も不十分でずさんな診療体系をもつ病院であれば、両者の条件は一致せず不適応の状態に陥いるであろう。すなわち主体の側の几帳面さや客体の側の療養規律・管理監督のよさなどの特性は、そのままではそれぞれ独立して存在し、なんの関連も存在しない。しかし病人にとって療養生活の快適性や社会復帰如何は、そこに治療関係という場なり、それぞれの関係様態（一致、不一致、調和、不調和）の媒介があって始めて成立するものである。この関係構造は医療・教育・労働の場などあらゆる生活場面で認められるものである。要は、主体と客体の関係そのものに重要な意味が含まれている。

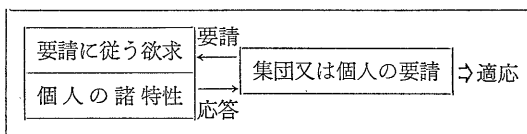
第2節 福祉の対象と適応

福祉の場における適応は役割適応である。役割概念についてはすでに既刊論文（仏教大学大学院紀要5号）に論述したが、その場合、役割の理解の仕方として二方向よりながめてきた。すなわち制度志向的な社会関係の側面での役割概念は、社会的ないし、文化的な期待に依存した社会体系の中に位置づけられ、他方、集団志向的な社会関係としての役割は、他人ないし集団との関係におけるパーソナリティに依存した過程的な側面、ないし前者の社会体系の機能的な意味という文脈から把握されたものである。役割適応とよばれるものは、前者の立場に関連して、戸川行男氏の論述を借りると、「適応の問題で最も重要なことは、適応が要求されていること、適応すべきであるとして、適応しなければいけないとして、要求されている」⁴⁾ ことにあり、つまり「要請への適応」という意味が含まれている。それは前者の意図をなすものとしての「自我対他者の文脈における権利と義務の系列」からくる要請である。たとえば職場生活には職務を通じての行動様式があり、その行動様式は役割要請に従って、職業生活を維持している。適応はその役割がもつ要請に一致するとき成立する。さらに人は、家庭をもち、職場をもち、地域社会などで多様な集団に所属して生活を維持している。すなわち人の社会生活は、種々の機能集団に所属することによって、自己の欲求をみだし、自己実現への過程をたどるのであるが、それらの多くの集団に所属することはそれだけ多様な役割を付与されることになる。従って様々の集団に所属して与えられた役割の数（social roles）だけ、異種の役割要請に従わなければならない。

福祉における問題は、これらの要請される諸役割間における葛藤である。福祉の対象と援助の焦点はまさにこの部面に存在する。あらゆる機能集団から要請される諸役割がその要請の数に従って過不足なく遂行されれば問題はないが、それぞれの集団のもつ機能や内容、性格はまちまちであり、要請の方法や質は相互に異なり、それらが全くなんの連絡調整もなく、バラバラに存在している状態にあっては、それぞれの役割間での葛藤はさけられない。例えば家族集団のもつ役割要請と職場集団のそれとでは、両者の集団の機能や性格の相違によって要請のされ方や内容が異なり、問題の質によっては相互に対立し、緊張を生じさせる結果ともなる。この場合、ソーシャルワークに期待されるものは、それぞれの集団のもつ役割要請に対して、緩和したり、延期したり、要請の内容を変えたりして、集団間の葛藤を回避、調整、除去すると

ころにある。

さて今までの適応は要請への適応であったが、要請にこたえる側の内容を検討しなければならない。これには、役割概念の后者の立場に関連して解説される。戸川氏は「要請は要請として受けとられ、従うべきものとして受けとられてはじめて要請となる。服従すべき意欲のないところに要請はない。解決しようとする欲求があって、はじめて課題が課題となる。適応しようとする欲求があってはじめて要請は要請」⁵⁾ となりうる。すなわち、適応が「欲求」にもとづく、目的的行动であることを意味している。引用が長くなるが氏の適応概念が福祉における適応の意味の解明に多く教えられるところがあり、示唆に富むものがあるため、さらに再び引用する。「適応が要請への適応である、ということと、適応しようとする欲求にもとづくということとは最も重要な二つの点であるが、両者は適応ということの異なった二つの面に関する特性であると言わねばならない。すなわち前者は『適応関係』または『適応状態』に関する特性であり、後者は『適応機制』に関する特性である。適応は環境と個人、あるいは人と人というような二つのものの間に成立つ。適応という関係の関係項の一方には、いま適応が問題とされている個人の能力、資質、性格、習慣、行動様式、体力、その他の特性があげられ、他の項としては彼が属する集団の諸要請、ないし特定の個人の諸要請があげられる。適応は、個人の諸特性と集団または特定の個人の要請との間に成立つ関係」⁶⁾ である。以上の事柄を図示すれば次のように整理される。



すなわち個人の要請に従う欲求、つまり役割実行を規定するものが能力、資質、性格、体力などの個人の諸特性に依存する。この場合ソーシ

ヤルワークは個人の諸特性に規定されて要請に従う欲求が遮断された場合に、個人の諸特性を緩和、調整すべく機能する。

さてこれまでソーシャルワークの中心的な課題を明確化する意図で、その概念枠を「役割」に見出し、その内容や機能をみてきた。更に「役割」と「適応」がいかに関わり、いかなる状態にあるかを知るために「適応」の意味を規定した。しかしこの役割適応の概念がソーシャルワークの実際において、実践価値を有しているかどうかはさらに検討する必要がある。

構造主義に導かれ、福祉と構造主義の接点たる「全体性の原理」が共通の基盤たる「相互作用関係」(この脈絡については仏教大学大学院紀要第5号に詳述)は、人間が生物的、生理的存在者として、あるいはまた、精神的、文化的、存在者として、低次元の領域から高次元の領域に到る広い領域に亘って生き続ける場合の、統合的作用をなすものである。人間が物的、人的環境の中で、あらゆる関係を結び、それらとの関係の結び方が、人間的意味を付与し、喜びや悲しみ、苦悩をその中に包略させているのである。ここで相互作用概念を起用することによって、構造主義における「構造化の原理」及び「自己保存の原理」を応用して、変化概念の経過を追ひ、

もって「適応」の実践的・治療の意味を考察したい。

第2章 「動き」から適応へ

第1節 ソーシャルワークの志向する「変化」に作用する相互関係の意味

人間の生活は生物次元から社会次元及び精神次元に到るまで、あらゆる人間をとりまく内的・外的世界との相互作用の体系であるといっても過言ではない。さらに人間性の開発は対他者関係において増進し、生物学的次元を越えて高次の人間的要素を具備することができる。

P, E, ジョンソン (P.E. Jonson) は、対他者関係を次の5つのディメンションに分類している。⁸⁾

1 心身の「主我」—「客我」(Iとme) の関係

これは精神分析家の用いる理論であって、対他者関係における主体としての「主我」(I) が自分自身を認識するとき、主体以外の「客我」(me) の存在と関係して、自分自身を思考し期待する。つまり、「主我」と「客我」の相互作用より一種のイメージを形づくり、それにより、パーソナリティの形成と発展を伸長させる。

2 環境との「われ」—「それ」(I—It) の関係

場理論によって代表されるもので、人はあらゆる物理的世界の絶え間ない交渉を通じて、自分の世界を形成していく。人間は自己をとりまく物質界との関係において、単に空間的接触によって関係づけられているのではなく、人間はそれらの関係において選択者としてあるいは組織者として存在し、自己の環境から主体的に対象を選び出し、物理的、主観的世界を主体の興味や関心に即応させ、主観的な意味づけを行なう。すなわち自らの世界の創造者として望ましいものにしていくのである。つまり、人間は自分の環境世界を好ましいものに造りかえていくのである。

3 集団生活「われ」—「われわれ」(I—me) の関係

人間関係論者の主唱する立場である。論旨は、共属意識にささえられた「われわれ体験」を通じて、人間結合の可能性をさぐる理論である。人間が共同生活を営むとき、「われ」と「なんじ」が根となって存在しているが、現実場面ではそれらが更に「われわれ」という型で拡大していく。従ってそこには、集団或は社会との関係が存在している。人間はいろんな集団に参加し、自由に同化でき、そして、それぞれ異なる関係の中で、さまざまな役割を遂行していく。そのような結合体の中で自己を変化形成していくものである。

4 神への「われ」—「なんじ」(I—thou) の関係

人間は常に自己のよりよき改善を求めて、何ものかを追いもとめる。自己を高遠なものとするために、自己の衝動を抑圧して、より偉大なものに接近しようとする。人間は全存在をかける究極的なものをさがし求め、それを絶対者としてあがめる。自己と絶対者との関係を「信仰」によって結び、それは人間に宗教体験として覚知される。この「なんじ」はフロイドの「超自我」以上のものである。「超自我」は倫理、道徳、神に対するイメージであるが「なん

じ」は客観的な実在として、大いなる力にふれているような確信と実感を覚えさせる。この絶対者との交わりにおいて、人間の精神的成長をとげるものである。

このように、人が他人や環境と相互作用をもつ過程は、以上のごとく対象や相互交渉の質と広がり、大いなる相違と多様性を有していることが分る。すなわち、一口に相互作用と言ってもその内容は、非常に多義的で、複雑である。要は人間存在の形態は単独にあるのではなく相互作用の力動性の中に存在している。ソーシャルワークの場面にとらえられる問題事象も、人間それ自体でも、環境そのものでもなく、「相互作用的な場面」として把握すること。ワーナー・W・ベーム (Werner W, Boehm) も強調しているごとく、援助の方向は「個人が個々におよび集団的に、効果的な相互作用をもつのを推進すること」⁹⁾ として、ソーシャルワークの援助の視点を明らかにしている。すなわち人間生活の全体像に飽くなき追求の目をそそぐソーシャルワークの活動は、クライアントのかかえる問題状況に応じていろいろな相互作用関係がもちこまれる。ソーシャルワークの展開過程、特に面接場面では、ワーカー対クライアントの間にもたらされる関係の質は、ジョンソンの指摘する対他者関係の種々の関係様態が、恣意的にしる意図的にしるしばしば取り入れられて、クライアントの変化を触発させる手段になっている。

ソーシャルワークの実践活動の目的は、クライアントのもつ問題を媒介にしてワーカー対クライアントの相互作用関係を通じて変化の過程をたどることにある。治療による変化は、一つの過程であると考えられ、過程とは、個人及び対他者関係の中で継続する諸事象の流れとして把握しうる。このことからソーシャルワーク治療は、過程の追求と方向に重大な意義が存在していることが分る。そこでこの変化の過程を考究するにあたり、論旨をより明確にするために系統的に三方向よりアプローチしてみたいと考える。

まず最初に、変化過程の明確化、第二に構造主義における形成の概念を構成する「変換性の原理」及び均衡循環過程を追求し、第三は、第二の課題をより発展させソーシャルワークの処遇効果の共通認識をえたい。

第2節 「動き」とは何か

ソーシャルワークの場面において、ソーシャルワーカーの最大の関心事は、クライアントの行動に「動き」があったかどうかということにある。ソーシャルワークの臨床場面で期待されることは、ソーシャルワークの過程を通じて、クライアントの態度なり、言葉になんらかの「動き」が認められ、なんらかの方向へ動機づけられることにある。つまり、われわれの関心はクライアントが現在如何にあり、過去において、いかにあったかということよりも、彼がどういう状態に変化していくのかというその後の動きに関心がある。しかし問題は、単に変化があったかどうかということだけでなく、いかなる変化があったか、つまり、変化の質が問題になるのである。変化はかならずしも、クライアントにとって進歩や発展を意味するものではない。ソーシャルワークの過程でクライアントの態度には、積極的側面と消極的側面を並存させ

自分自身と自己をとりまく環境状況をよく認識し、これらの内的、外的状況に意欲的に働きかけ、改めるべき意志及び行為をみせたかと思うと、次の段階では全くその意志も意欲もなくしてしまっている場合が認められる。われわれはこのように積極的、肯定的次元から、消極的、否定的次元へ、またその逆に、消極的、否定的次元から積極的、肯定次元へと交互に移行過程をたどるクライントの例をよく経験する。人の行動はあたかも、それは引いては打ちよせる波のようなもので全くうつろい易いものである。

ソーシャルワークはこのような任意の人間行為のどの部分をとらえて、その処置効果をためそうとするのであろうか。そこでそのような人間行為の変転において、動きから成長への契機をさがってみる。

1 「動き」の理論的仮説

従来、クライエントに対する処遇効果の漠然とした目安に、クライエント自身、及び環境における「動き」に焦点をあててきた。しかし、「動き」として表われる表徴—それは言語、感情、態度、行為のいずれの表現形式をとろうと—そのものがソーシャルワーク効果の最終目標でないことは明らかである。つまり、「動き」があったかどうかということと、ソーシャルワークの効果が問われることは別問題である。単に「動き」そのものが目的であるのなら、ソーシャルワークの固有性は見出しえない。他のあらゆる相互関係において成立するものであるから。

ここで問題にされる事柄は「動き」の過程の中に質的差異が存在するかどうかである。すなわち「動き」の存在、及び状態ではなく差異と方向である。

社会心理学の分野では、「動き」ないし変化を個体と環境との相互作用関係によって、もたらされたものとして次のように図示している。¹⁰⁾

$W-O-W'-O'-W''-O'' \rightarrow$ 時間的連続系

- Oは個体
- Wは個体を取りまく人的、物的環境
- —は相互作用関係を表わす。

環境がどのように個体に働きかけるかが、 $W-O$ の関係であり、個体がいかに環境に働きかけるかが $O-W$ の関係である。

この一連の時間系列の内で個体の側では、OとO'、O'とO''の間には、「動き」ないし「変化」が起っており、環境の側面ではWとW'、W'とW''との間に個体と同じ「動き」がある。さらに「動き」を質的差異と質的方向に焦点をあててながめた場合、OないしWの状態から「O+1ないしW+1」が「より良い」状態であり「O-1ないしW-1」が「より悪い」状態を示している。「+1」「-1」がここでいう質的差異である。すなわち

イ 「O+1, W+1」の意味するものは、進歩、発達、成長などの肯定的、積極的な傾向が志向されるものと解釈される。

ロ、他方、「O-1, W-1」は後退, 退歩, 抑圧を意味し, 否定的な傾向を志向するものと考えられる。

ハ 「O, W」は現状維持ないし, 停滞状態を表わす。

しかし何に対して「より良い」「より悪い」のか, また何に基いて「より良い」「より悪い」のか根拠が曖昧であり, 評価基準の客観性の欠如ないし普遍妥当性に欠けることにより, 実践的有效性は認められない。

2, 「動き」に対するソーシャルワーク的接近

「動き」がソーシャルワーク過程においていかなる形で導入されるかは未だ論及されていない。また「動き」の質的差異に対する評価の方法は抽象概念として成立しえてもソーシャルワークの実践においては問題を残してきた。むしろソーシャルワークの次元で問題になるのは「動き」の形相化であり, 「動き」がクライアントの成長への契機とどう結びつくかということにある。アプテッカー (H. A. Apter) は「動き」が存在する場合の動機と「動き」の性質を次のように説明している。

彼は動きを起こさせるものは, 苦境に立つことによって発動され, なんらかの障害が生活過程のスムーズな流れを妨害することによってエネルギーの解放を行い, 以前の状態にもどろうとする。すなわち「成長発展はさまざまな傾向の対立葛藤の結果生まれるが, その対立葛藤が個人内部の緊張を高め, ついには, 爆発点に達するようになり, 変化が起こるのである。ケースワーカーが動きをたどっていく場合に観察するのは, このような過程である」¹²⁾ つまり「動き」は苦境という生活過程の機能障害によって引き起こされ, その生活障害に対する心理的メカニズムは, 基本的には問題に積極的に対処しようという衝動とそこからのがれたいという二つの傾向によって移行し, この対立葛藤が個人内部の緊張を高めて, 爆発点に達し, ついに変化がおこる。しかし「動き」は対立する二つの傾向によって引き起こされ, 変化の表徴を示した一方に「動き」の確証をつかんだとして, それのみにソーシャルワークの関心をそそいでしまうとすれば, それは客観性にもとる。なぜならクライアントの内部には相対立する二つの優性でない一方が保存され, いついかなる場合に顕在化するかわからない状態にある。常に変化の中に保存の性質を見落してはならない。ソーシャルワークの目標は, 伝統的に「個人の健全な適応」にあるといわれるが, この「動き」と「適応」との間にはいかなる関係が成り立つのか。この「動き」の目的志向的な面, すなわち成長発展側面を「適応」のあるべき姿とした場合, この積極的適応とは逆の消極的な適応をどう扱うか。このような適応の形態についてアプテッカーは次のように類別している。「より健全な個人的適応」と「症状の消失を含む適応」¹³⁾ の二つであるが, 前者は積極的適応として肯定的性質を有し, 後者は消極的適応として現状維持的である。そして彼は成長を医療における「治癒」(cure)と似たものとして「治癒」を促す治療行為は, 治癒とよばれる自然的生命過程を強化し, その逆の過程を抑制する。つまり彼

のいう治療行為とは、生命維持過程と逆の過程のバランスを扱うものである。つまり治療とはホメオスタシスの機能を阻止しているものを除去する作用である。

ホメオスタシスの生理的な概念は、精神の統合や平衡維持機能、個体と集団との力動的な均衡などの説明概念となり、個人、家族、社会という構造の中でよく理解されている。

ホメオスタシスのソーシャルワークに与える意味は、ホメオスタシスの機能が単に同じ状態に復帰するという一面的な作用からではなく、つまりホメオスタシスの真の目的は「静的 (static) な意味での必要な条件と調和するような、生産的ではあるが、統制された生体の不安定 (instability) を保つこと」¹⁴⁾にある。すなわち、不安定性が個人と環境との流動的な相互作用の力動的均衡維持の過程の中にあり、自己調整の内部運動に刺激を与えるこの不安定性の感情が動きへの原動力になる。人は二元的な存在であり、その感情や動機は二律背反的である。ソーシャルワーカーの人間理解への要点は、このような二元的平衡状態がなんらかの障害で破れた後、再び平衡を維持する場合のクライアントの変化に注意をそそぎ、その後のクライアントの行為を予測する。このような力論的人間行動に対する科学的かつ、客観的な知見を得るために構造主義の「構造化の原理」と結びつけて考究したい。

第3節 「動き」の構造主義的接近

ソーシャルワークの対象は一つの「構造」をもつとただだけでは何の意味もなさない。ソーシャルワークは変化する過程であるから対象も過程につれて変化する必然性をもたなければならない。そうでなくては、ソーシャルワークの処遇効果は期待されない。ソーシャルワーカーが求めている構造は、いかなる推移の中にあっても、変化しないという「構造」を志向しているのではない。「構造」は不変型をして存在しているのでもなければ、はじめから与えられているものでもない、構造は「変形」ないし「形成」の過程とみなされる。それはソーシャルワークの目的が、個人と個人、個人と環境との相互交渉を通じて、損なわれた生活機能の回復をはかり、あるいはまた、前に認められなかった行動様式が発現してくるような場合に、個人及び個人と環境の構造は必ず変化をきたす。すなわち「構造」は構造化であり、構成である。環境との相互作用を通じて、一定の構造を形成し、一段階ごとに積み上げていくものなのである。この場合、形成に影響を与える種々の要因の発見が不可欠の課題となるが、それはむしろ発見された諸要因がいかなる形をとって相互に働くか、その働きに関心がよせられる。すなわちクライアントの生活状況下で、変化と形成のための再体制化や、発展を志向するための諸要因間の相互の働きにソーシャルワーカーの関心が集中される。諸要因が相互に働き合う原理が「均衡化」の原理である。この「均衡化」の原理は「形成」ないし「発達」の概念にはかかえない。

「均衡化」のメカニズムは、変化するプロセスであり、力動的な過程である。すなわち、「構造」は一つの均衡状態を維持しているが、一旦、内的、外的プレフシャーが加えられれば、均衡の維持は困難になり、均衡の破壊が生じる。しかし、構造はこのような不均衡な状態を回復

しなければならず、再び均衡化をめざす。これが「再均衡化」である。この場合に生じるものと構造と再均衡後の構造との差異が、「動き」ないし「変化」として評価される。この「動き」ないし「変化」は、もはや表現上の意味として存在しているのではなく、形成された構造の内部の深いところに包含されている。なぜなら、均衡化のメカニズムは人が「外界に働きかけつつ自分自身の構造を変える」という型で進むからである。それはむしろ、可視的な外的環境や外的行為に表われるというより、個人の内部の能力や態度に依存している場合が多いと言われる。一過性の単につじつまを合せたような「動き」ないし「変化」ではなく、「持続的な変化」として認識されるものである。そこでソーシャルワーク過程にこのような知見を取り入れるとしたら、第一に問題の要因分析に着目し、第二段階でこれらの要因かどういう構造をもって相互に働きあっているかをみきわめ、第三段階で均衡化を志向する。そして第四段階で評価として前の構造と再均衡後の構造の差異を求める。以上の4つの段階的な手続がソーシャルワークの過程の構造主義的接近と言えよう。つまりソーシャルワークのゴール(goal)のきめ手たる尺度が発見されていない現在、対象のもつ構造が均衡化過程とホメオスタティックな状態との交換の過程で、このホメオスタティックな相対的に安定したときを目安にソーシャルワークのゴールとし、「適応」の成立したときと考えるべきである。通常ソーシャルワークの過程において以前の行動が新しい段階で、完全に克服され、消去してしまったことはほとんどない。新しい行動が表われた段階にも、なお古い行動が残っていて時折発現する 경우가しばしばある。特に精神現象において、正常の段階では、成長と共に知的行動に統合され、制御されているものであるが、危機的場面では以前の段階に退行して、知的な行動を不可能にする場合もある。このように変化してやまない個体やその環境においてソーシャルワークのゴールとしての適応規準は、均衡状態が破壊されて、再均衡を回復したときをもって、「適応」の状態と考えるべきである。

J・ピアジェ (Jean Piaget) は「変化」の概念を次のように述べている。

- 1, 変化は段階をなす、故に後の段階は前の段階を部分として含んでいる。
- 2, 変化は前の段階の必然的な結果として起り、次の段階へ必然的に連なる。
- 3, 変化は生成変化の相と最終的均衡の相からなる。¹⁵⁾

このように変化の過程は、「動き」の積み重ねによる一連続体である。同時に変化は動きの相と均衡の相の二側面を有し、均衡の側面を最終のものとしている。それでは前述したように均衡の最終段階をもって「適応」の完成したものと見た場合、この均衡概念に支えられた「適応」はソーシャルワークの技術と治療にどれほどの実践的価値を付与しうるか。

ピアジェによれば、「均衡化」を支える操作的メカニズムは「同化」(assimilation)と「調節」(accomodation)という対をなす概念の働きとみなしている。「均衡化」はこの二つの概念の働きの結果として成立するものである。それでは更にもう一步進めて、「均衡化」を支えるこれらのメカニズムを探究して、「適応」の意味を明確化してみよう。

第4節 体験過程としての「同化」と「調節」による適応

人間は自分の生命を維持するために、環境からエネルギーを享受し、生体からエネルギーを放出して、バランスを保っている。すなわち、環境から刺激を受け、刺激を受けるたびごとに以前の状態とは異なった反応の仕方を示し、より新しい方向を生み出している。この状態が如何にしてひきおこされるかは、入谷敏男氏によれば、経験による学習の結果であると説いている。そしてこの学習が何に基いて起こされるかは次の言説で理解される。「そのような学習の機能を発揮させる能力が人間に潜在的に備わっているからであると仮定することが可能である。人すなわち人間はこのような潜在能力を発揮して、環境からの働きかけに対して、絶えず環境に対して働きかけ、環境と動的平衡の状態をつくりながら絶えず進化、発展」¹⁶⁾ していくものである。ところで潜在的な能力とは何か、さらにもう一步すすめて、もっとも主要な概念である「均衡化」を支える内的メカニズムについて探究する必要がある。

「同化」とは、一言でいえば外のものを自己のうちにとり入れることである。「調節」とは自己の構造を変える働きをなす。¹⁷⁾「均衡化」は「同化」と「調節」のバランスであり、「同化」と「調節」とのバランスが「適応」なのである。¹⁸⁾ すなわち「適応」とは「同化」と「調節」が過不足なく遂行され、その結果として、「均衡化」が成立する。その「均衡化」が成立したときが「適応」なのである。

「同化」が支配的となり、「調節」が追随しない場合は、均衡も適応もない。またその逆も真である。人が人とあらゆる環境との関わりで、状況判断をなし、適切に処置するようになるのも、外の刺激がとり入れられ（同化）それと同時に自己の概念なり行為なりを変化（調節）させている故である。たとえば、家族において、夫として、あるいは父親としての役割を理解し、役割実行を貫徹しようと行動様式を改変していく過程が適応である。ところが、夫ないし父親の役割を放棄して、自分の両親に抱くような子供の役割を自分の妻や家族のものに要求しそのような行為をとるとすれば、「同化」と「調節」の働きは昌され、不適応の状態を現出する。

結局、人は環境との相互交渉に基いて、今まで経験されなかった環境からの働きかけに対して、経験の蓄積によって作り上げた行動様式を動員して、環境を制御し、それをとり入れる時自己の行動様式の内に新しい経験を生み、それが次の適応様式のために内在化されていくのである。¹⁹⁾

第3章 ソーシャルワークと構造主義の融合

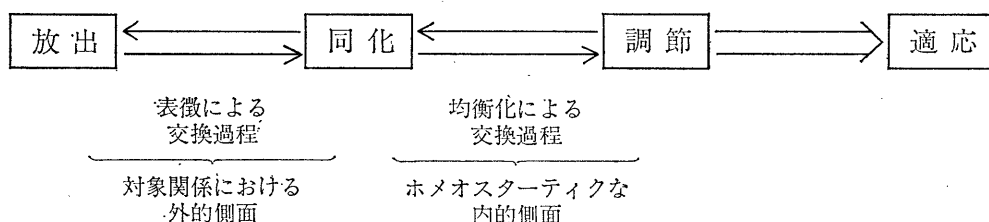
ソーシャルワークの分野において、奇しくもピアジェの構造主義における同化概念と同意味に用いるものに、バージニアロビンソン (Virginia. Robinson) とアプテッカーがいる。²⁰⁾

アプテッカーによれば、構造主義における「同化」(assimilation) と全く同意味で使用している概念として「同一化」という用語を用いている。「同一化」とは「摂取」(taking) を意味

する。ただ彼の場合、ピアジェが「同化」と「調節」の対概念で「動き」の均衡化の側面をみようとしたのに対し、同じような対概念を用いるにしても「投射」(放出 putting out)と「同化」の交換過程から「動き」を分析しようと試みている。

ピアジェは「均衡化」の操作概念として「同化」と「調節」の交互の過程を引き出したのに対して、アプテッカーは「動き」の根源を「同化」と「放出」との相互過程においている。ワーカーとクライアントの関係は、放出(陳述)と同化(聴取)との交互の関係が動きを生じさせる。この状況を説明してアプテッカーは次のごとく述べている。「クライアントは、自分の困難を語る(投射=放出)。ワーカーはそれを受容、あるいは同一化(摂取)し、次のクライアントが行動する可能性を示す(放出)。もし、クライアントが、これらワーカーの提示する可能性をある程度同一化(同化)するならば、クライアントは、自分の状況に対する新しいコントロールの道具を獲得する」²¹⁾ これらの状況は「同化」と「放出」の「交換過程」からなっている。この交換の過程より、「動き」が起るが、「動き」は「均衡化」たる「適応」の方向を志向する。その「適応」は「同化」と「調節」の交換過程にささえられたものである。主にソーシャルワークにおける「同化」と「放出」の関係は、上述のごとくワーカーとクライアント、あるいは環境との対峙関係において成立するものであり、構造主義の「同化」と「調節」は個人の内部のホメオスターティックなメカニズムとしての内部的機能であって質的には異なっている。この両者を結びつける中核概念は、明らかに「同化」の概念以外にはない。「同化」は両者の共通概念である。なぜなら「同化」の作用は「絶えざる関係づけと対応づける源泉であり適応などの源泉でもある」²²⁾からである。

以上のことから「放出」「同化」「調節」の三つの交換過程を図示すれば次のようになる。



「関係づけの源泉」である「同化」は、対「放出」関係において比較的表徴的な「動き」が予想され、「同化」と「調節」との関係では、深層のレベルで「均衡」による内的変化が考えられる。ワーカーを含めてクライアントをとり囲む環境は、クライアントをして「放出」と「同化」の交換過程を経て「同化」と「調節」との均衡化の過程の後、「適応」を成立せしめるのである。この図式が明示しているのは、ソーシャルワーク理論と構造主義原理とは「同化」概念を媒介にして、「動き」より「均衡化」へ移行して最終的に「適応」に到達する過程を明らかにしている。

かくしてソーシャルワークの理論と構造主義理論は「同化」概念を中核にして結びつき、

「動き」から「適応」への一貫した力動性のある理論的枠組を考究してきたのである。

○体験と治療

「適応」は「放出」と「同化」の交換過程より生じた「動き」が「調節」の過程を経て導き出されるものである。クライアントがワーカーとの交換関係で得られた「動き」は「同化」の過剰でもなく、また「調節」の過剰でもない「均衡化」の過程の最終的なものとして「適応」があった。この「適応」の過程の理論的枠組は、ただソーシャルワーク分野にだけ用いられるのではなく、対他者関係を持つ諸分野で応用される理論的根拠を提供せしめるものと考えられる。

特に「同化」と「調節」との均衡化過程における「メカニズム」は、個人の内的世界において展開されるものであり、顕在的なものとしては把握されない。すなわち、「適応」への変化は体験の過程として扱われるものである。ソーシャルワークの処遇において、個人の体験過程はワーカーにとって大いに関心がよせられ、ソーシャルワークの処遇効果の評価につながるものである。それではこの体験過程はいかなる意味をもち、いかなるものであろうか。ユージン・ジェントリーは体験過程の特色を6項目に分けて説明している。

- ① 体験過程は感情の一つの過程であって、常に情緒のともなっているものである。
- ② 体験過程は現在この瞬間において生起する。
- ③ 体験過程は一つの直接的なりファラント (referent) である。すなわち、体験過程それ自体は、外から観察できるものではないが、治療中にクライアントは、身振り、声の調子表現様式、言葉を観察することによって、体験過程に直接リファアーしていることを知る。クライアントは治療過程において何かわからぬままに内部で「動き」と感じられるものを表明する。
- ④ 体験過程に導かれて概念化が行なわれる。③でみたクライアントの、そのような気持として表現されていたものが、概念を使って、それを形に言い表わそうと試みる。すなわちクライアントは、概念的明瞭化（自己の述べたことを考えて、「そうだその通りだ」と覚知する）を行なって、自己の感情を明らかにする。
- ⑤ 体験過程は、豊かな意味を暗に含んでいる。意味は感じられるものであって、明示的に象徴を用いて明らかにすることはできない。暗に含まれている意味は、非常に複合的で多様である。体験過程は、暗黙の意味に満ちたものであり、感じられた素材である。
- ⑥ 体験過程は一つの前概念的、有機的な過程である。現在体験しつつあることについて、直接的に感じられた素材は、暗黙の含蓄を含む前概念的な意味をもつものである。感じられた素材についての体験過程は意識的なものであり、クライアントは感じ、語り、そして概念的にとらえようと試みる。この体験過程のもつ、暗黙の意味含蓄は、覚知 (awareness) によって知られるものである。²⁹⁾

以上ユージン・ジェントリーは治療過程における体験過程の特質にそって、段階的に解説したのであるが、彼の考えている治療的变化は「単に個人が考えたり、言葉で表わしたりするよ

うな、二、三の概念的な意味のみに関連するものではない。治療的变化は、次のような一つの過程の結果として、生ずるものである。すなわち、その過程においては、もろもろの含蓄的で暗黙の意味が、言語化されることなしに覚知の世界の中で強く感じられ、直接にリファーされ変容されるという点に特徴がある。このような意味で、治療過程には体験過程が含まれる」と指摘する。彼の治療概念はまさしく、ソーシャルワークの処遇におけるクライアントの内面に生起するものを系統的に段階を追って解説するものである。彼の言説は、クライアントの顕示されることのない隠された内的変化を了解させるに十分な資料をわれわれに提供してくれる。このことはつまり、ソーシャルワークの治療的効果の証左として「変化」及び「動き」の概念に対する方向性と「変化」及び「動き」の積極的、肯定的な評価を強調しうる理論的根拠ともなり得る。また、彼の理論は、構造化原理における構造変化のメカニズムたる「同化」「調節」の機能と過程を明らかにし大いなる示唆を与えてくれた。ピアジェの構造化原理において、「同化」と「調節」の間断なき交換の結果、構造化の機能的な作用については明らかにされたが、この構造化の内部調節のメカニズムや機能は未だ実証的には明らかにされたとは言いがたい。しかし「同化」と「調節」の実践的、治療的価値は、まさしく、ユージン・ジエンリーの体験過程を通じて、そのメカニズムが明らかにされたと言えよう。特に構造化のための「調節」におけるソーシャルワークの処遇の意義は「調節」の内的変移にあり、上記の体験過程の特質におけるものの段階的移行をたどるものと解せられる。

すなわち、「調節」の過程は①感性の過程に始まり、②現在の時点に生起して、③直接的にリファーして、④概念形成をなして、⑤暗黙の意味を志向し、⑥「調節」の体験は覚知の中で感じられるのである。

かくしてソーシャルワークの処遇上の特質と治療過程における実践の有効性を問う手段として構造主義の原理を採用し、ソーシャルワークの処遇効果の実証性を追求することに専念してきたのであるが、伝統的技法による治療のメカニズムを追求するあまり社会状況との対応というマクロ次元での問題認識が欠如した。しかし本論では人間に視点をあてて、個人にもたらされるソーシャルワークの技術的処遇の結果に起るメカニズムを明らかにしてソーシャルワークの援助への有効性を高めるための試論を展開したものである。

(未完)

引用文献

- (1) 北村晴朗：適応の心理（東京，誠信書房，1965）27～35頁
- (2) 戸川行男：適応と欲求（東京，金子書房，S，44）11頁
- (3) 同上書，20頁
- (4) 同上書，22頁
- (5) 同上書，26頁
- (6) 同上書，26頁
- (7) 松本武子編：ケースワークの基礎（東京，誠信書房42S）209頁

- (8) P・Eジョンソン, 小野泰博訳, 我と汝 (東京, 誠信書房S, 42) 285~307頁
- (9) 松本武子編: 上掲書 9 頁
- (10) 波多野完治: 現代心理学ハンドブック (東京, 学芸書房S, 37) 31頁
- (11) F・B・バイスティク著, 田代, 村越共訳, ケースワークの原則 (東京, 誠書房S, 45) 39頁
- (12) H・H・アプテッカー著, 黒川昭登訳, ケースワーク入門 (東京, 岩崎学術出版社1968) 78~79頁
- (13) 同上書, 71頁
- (14) ネーサンルアッカーマン著小此木啓吾, 石原潔共訳, 家族関係の理論と診断 (東京, 岩崎書房1966) 111頁
- (15) 波多野完治, 上掲書, 30頁
- (16) 入谷敏男: 新社会心理学 (東京, 東海大学出版社) 23頁
- (17) 波多野完治: ピアジェの発達心理学 (東京, 国土社) 5 頁
- (18) 渋谷憲一, 井上尚美編: ピアジェによる論理的思考の構造 (東京, 明治図書) 63頁
- (19) 入谷敏男: 上掲書24頁
- (20) H・Hアプテッカー著, 黒川昭登訳 上掲書83頁
- (21) 同上書90頁
- (22) J・ピアジェ著, 滝永武久・佐々木明訳構造主義 (東京, 白水社S, 45) 77頁
- (23) ユージン・ジェントリー著, 村瀬孝雄訳: 体験過程と心理療法 (東京, 牧書房1966) 20~29頁